宮崎市文化財調査報告書　第69集

やまさきうえのはるだいにいせき

山崎上ノ原第2遺跡Ⅲ

携帯電話用無線基地局建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

宮崎平野砂丘列（南西より）

2008

宮崎市教育委員会

序

本書は、宮崎市山崎町字上ノ原における携帯電話無線基地局建設に伴い、宮崎市教育委員会が平成18年12月から平成19年1月まで発掘調査を実施した、山崎上ノ原第2遺跡の発掘調査報告書です。

山崎上ノ原第2遺跡は、太平洋を臨む宮崎平野の海岸部に形成された砂丘上の遺跡です。この砂丘上には、本遺跡を始め、多数の遺跡が存在しており、市内でも有数の遺跡集中地帯となっています。

また遺跡だけではなく、本遺跡に隣接する江田神社には、日本神話における神々創生の場であるイザナギノミコトの禊ぎ池があり、歴史と伝説に彩られた、ロマン掻き立てられる地域です。

遺跡の多数存在することは、遥かな昔から人々がこの地を生活の場としていたことを示し、そして神話の舞台となっていることは、その人々がこの地に愛情と誇りを持っていたことを示しているのでしょう。本書がこの地に生きた人々の足跡と思いの一端に触れ、歴史解明の一助となることを願います。

今回の発掘調査は、年を跨ぐ真冬の調査でした。冬の寒風の中、作業に従事していただいた作業員の皆様、また文化財保護にご理解いただくとともに、様々な便宜をはかっていただきました株式会社エヌ・ティ・ティ・ドコモ九州並びに株式会社[redacted]の皆様には、末尾ながら、心より御礼申し上げます。

平成20年3月

宮崎市教育委員会

教育長　田　原　健　二

例　言

1．本書は宮崎市教育委員会が平成18・19年度に実施した山崎上ノ原第2遺跡の発掘調査報告書である。

2．山崎上ノ原第２遺跡では、宮崎県埋蔵文化財センターにより、過去4次にわたって発掘調査が実施され、２冊の報告書にまとめられている（『山崎上ノ原第2遺跡・山崎下ノ原第１遺跡』2003年、『山崎上ノ原第2遺跡 Ⅱ』2006年）。したがって本書で報告する調査は「山崎上ノ原第２遺跡第５次発掘調査」とし、書名は『山崎上ノ原第2遺跡 Ⅲ』とした。

3．現地調査は、平成18年11月27日～平成19年1月26日の期間実施した。また整理作業は平成19年5月15日～平成19年6月14日の期間実施した。

4．調査組織

調査主体	宮崎市教育委員会		
	調査総括	文化振興課長	野田　清孝
		主幹兼文化財係長	山田　典嗣
	調査事務	主任主事	鳥枝　　誠（平成18年度）
		〃	吉永　大介（平成19年度）
	調査担当	主任技師	竹中　克繁
		嘱託	島井　伸幸（現地調査）
	補助員	〃	安藤　五月（整理作業）
		〃	稲元久美子（　〃　）
		〃	徳丸　理奈（　〃　）
		〃	永友加奈子（　〃　）
現場作業員	[redacted]		
整理作業員	[redacted]		

5．掲載した図面のうち、現場における実測は竹中、島井が、遺物の実測は永友、稲元、徳丸、安藤、竹中がそれぞれ現場作業員、整理作業員の協力を得て行った。

6．現場および遺物の写真撮影は竹中、島井が分担して行った。

7．本書で使用する遺構略号は以下のとおりである。

ＳＡ：竪穴住居　　ＳＥ：溝状遺構

8．本書の図で使用する方位記号はすべて真北を指す。

9．本書の執筆、編集は竹中が行った。

10．出土遺物および掲載図面・写真等は宮崎市教育委員会で保管している。資料の閲覧・利用等に関しては、事前に宮崎市教育委員会までお問い合わせいただきたい。

本　文　目　次

第Ⅰ章　遺跡の位置と環境
　第１節　地理的環境……1
　第２節　歴史的環境……1

第Ⅱ章　調査経緯
　第１節　調査に至る経緯……4
　第２節　当該地における埋蔵文化財の取り扱い……4

第Ⅲ章　調査成果……5
　ａ．遺物包含層……6
　ｂ．竪穴住居……7
　ｃ．溝状遺構……13

第Ⅳ章　まとめ……16

挿　図　目　次

第１図　周辺遺跡位置図……2
第２図　調査区配置図……3
第３図　遺構配置図……5
第４図　遺物包含層セクション図及び出土遺物……6
第５図　１号竪穴住居実測図及び出土遺物……7
第６図　２号竪穴住居実測図……8
第７図　２号竪穴住居出土遺物①……9
第８図　２号竪穴住居出土遺物②……10
第９図　３号竪穴住居実測図及び出土遺物……12
第10図　４号竪穴住居実測図及び出土遺物……14

図　版　目　次

図版１～10　現地調査……17
図版11～50　出土遺物……22

表　目　次

表１　周辺遺跡一覧……3
表２　遺物観察表……15

第Ⅰ章　遺跡の位置と環境

第１節　地理的環境

宮崎平野の海成地形は、海岸線に沿って南北に延びる砂堤、砂丘、堤間低地、氾濫原より成る。宮崎市域の海岸部では、海進、海退の繰り返しによって形成された砂丘（砂堤）が発達しており、一ツ瀬川の南岸から大淀川の北岸まで、内陸側から第1～4砂丘と呼称される4本の砂丘が列を成している。第1・2砂丘上には多数の遺跡が存在し、市内でも有数の遺跡集中地帯となっている。第1砂丘は最大幅1.3km もある幅広の砂丘であり、相応に遺跡の数も多い。対照的に第2砂丘は最大で幅0.4km弱と極めて細いが、遺跡分布の密集度は第1砂丘に遜色なく、本書で報告する山崎上ノ原第2遺跡も、この第2砂丘上に位置する。砂丘上には現在でも集落が密集し、居住空間として利用されているが、砂丘と砂丘の間、あるいは砂丘と内陸丘陵との間の堤間低地は、ほとんどが水田として利用されている。砂丘上に多数の遺跡が存在することから、砂丘周辺のこの空間利用は、古来よりほぼ同じ形で連綿と続いてきたものと思われる。

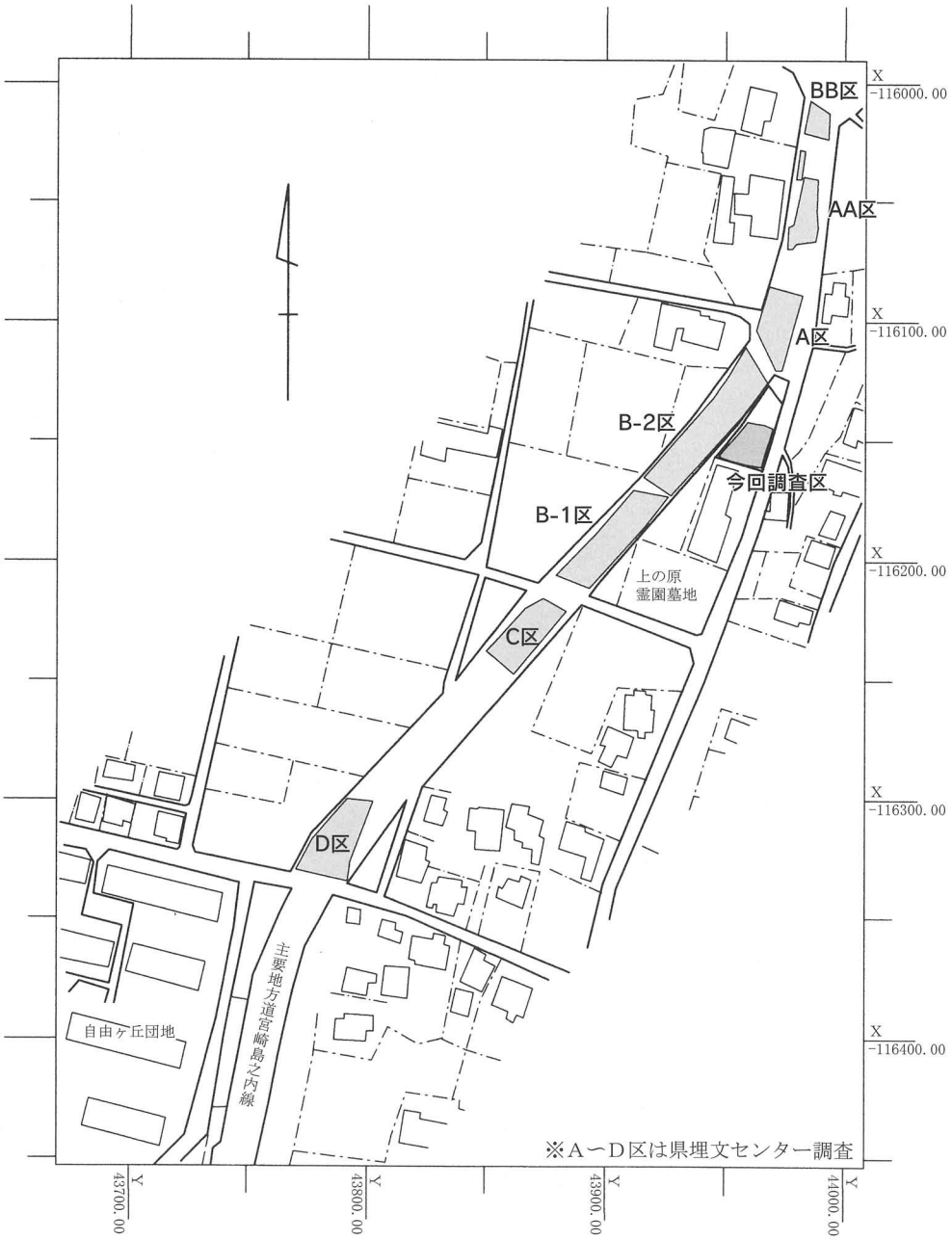
第２節　歴史的環境

前節に述べたとおり、第1・2砂丘上には多数の遺跡が存在するが、調査が行われているのは、殆どが第2砂丘上の遺跡である。1970年、宮崎市教育委員会によって調査された砂丘上南端近くの石神遺跡では、弥生時代を中心とした遺物包含層が検出されており、現在に至るまで第2砂丘最古の遺跡となっている。1995年、同じく宮崎市教育委員会により発掘調査が行われた猿野遺跡では、古墳時代の竪穴住居址11軒が検出された他、出土遺物は弥生時代、古墳時代、古代、中世とほぼ全時代に及び、砂丘上における人間活動が連綿と続けられたものであることを物語る。2001年から2003年にかけて、県道の整備事業に伴い、宮崎県埋蔵文化財センターにより、山崎下ノ原第１遺跡、山崎上ノ原第2遺跡（第1～4次調査）の調査が行われた。山崎下ノ原第1遺跡では、調査地に隣接する円墳檍5号墳、6号墳の周溝、消滅墳3基の周溝、馬埋葬土坑、中世の土坑墓などが検出され、北側の山崎上ノ原第2遺跡では、古墳時代から古代にかけての竪穴住居が60軒以上検出された。山崎下ノ原第1遺跡と山崎上ノ原第2遺跡の間は過去、谷地形であったことも確認されており、砂丘上における生活域と墓域という空間利用の別が明らかとなった。周辺の堤間低地においては、生活基盤となる水田遺構は現在までのところ未検出であるものの、第1砂丘と内陸丘陵との間の低地に位置する桜町遺跡では弥生時代の周溝状遺構群や古代の井戸が、第2砂丘と第3砂丘の間の低地中に位置する池開・江口遺跡では方形の溝を巡らす中世の掘立柱建物が検出されている。

第１図　周辺遺跡位置図（Scale:1/20,000）

第１表　周辺遺跡一覧

番号	遺跡名	番号	遺跡名	番号	遺跡名	番号	遺跡名
1	**山崎上ノ原第２遺跡**	13	高屋神社10号墳	25	檍北小学校校庭遺跡	37	山崎下ノ原第２遺跡
2	地蔵牟田遺跡	14	弥兵衛畑第２遺跡	26	城元遺跡	38	石神遺跡
3	桜町遺跡	15	弥兵衛畑第１遺跡	27	檍遺跡・檍第２遺跡	39	猿野遺跡
4	東大宮遺跡	16	東原遺跡	28	檍第１号墳	40	宮神遺跡
5	本村遺跡	17	吉十遺跡	29	麓第２号墳	41	中園遺跡
6	浮ノ城第２遺跡	18	萩崎第１遺跡	30	麓第１遺跡	42	松下遺跡
7	引土遺跡	19	長山遺跡	31	山崎上ノ原第１遺跡	43	前浜遺跡
8	檍小学校遺跡	20	村角第７・８号墳	32	山崎下ノ原第１遺跡	44	檍第３号墳
9	北中遺跡・柿本遺跡	21	萩崎第２遺跡	33	檍第５号墳	45	池開・江口遺跡
10	牟田中遺跡	22	大島火切塚遺跡	34	檍第６号墳		
11	水窪第２遺跡	23	浮ノ城第１遺跡	35	先切遺跡		
12	楸畑第２遺跡	24	江田原第２遺跡	36	檍第４号墳		



第２図　調査区配置図（Scale:1/3,000）

第Ⅱ章　調査経緯

第１節　調査に至る経緯

平成18年６月６日、ドコモデジタル携帯・自動車電話用基地局の建設計画に伴い、株式会社[redacted]取締役宮崎支店長[redacted]より、宮崎市山崎町上ノ原1101番１号における文化財所在の有無について、宮崎市教育委員会教育長あてに照会がなされた。当該地は周知の埋蔵文化財包蔵地「山崎上ノ原第２遺跡」に隣接しており、遺跡の存在する可能性が考えられたため、市教育委員会では同年7月31日に、当該地において埋蔵文化財の有無を確認するための試掘調査を実施した。結果として、事業予定地のほぼ全面にわたり、遺物包含層、竪穴住居及びこれらに伴う遺物の存在が確認されたため、市教育委員会では株式会社[redacted]及び株式会社エヌ・ティ・ティ・ドコモ九州との間に埋蔵文化財の取り扱いに関する協議を重ねた。結果、建物建築に伴い遺構面まで掘削の及ぶ270㎡の範囲を対象として、本発掘調査を実施することとし、平成18年11月27日から平成19年１月26日まで現地調査を実施した。また現地調査終了後の整理作業は平成19年５月15日から同年６月14日まで実施した。

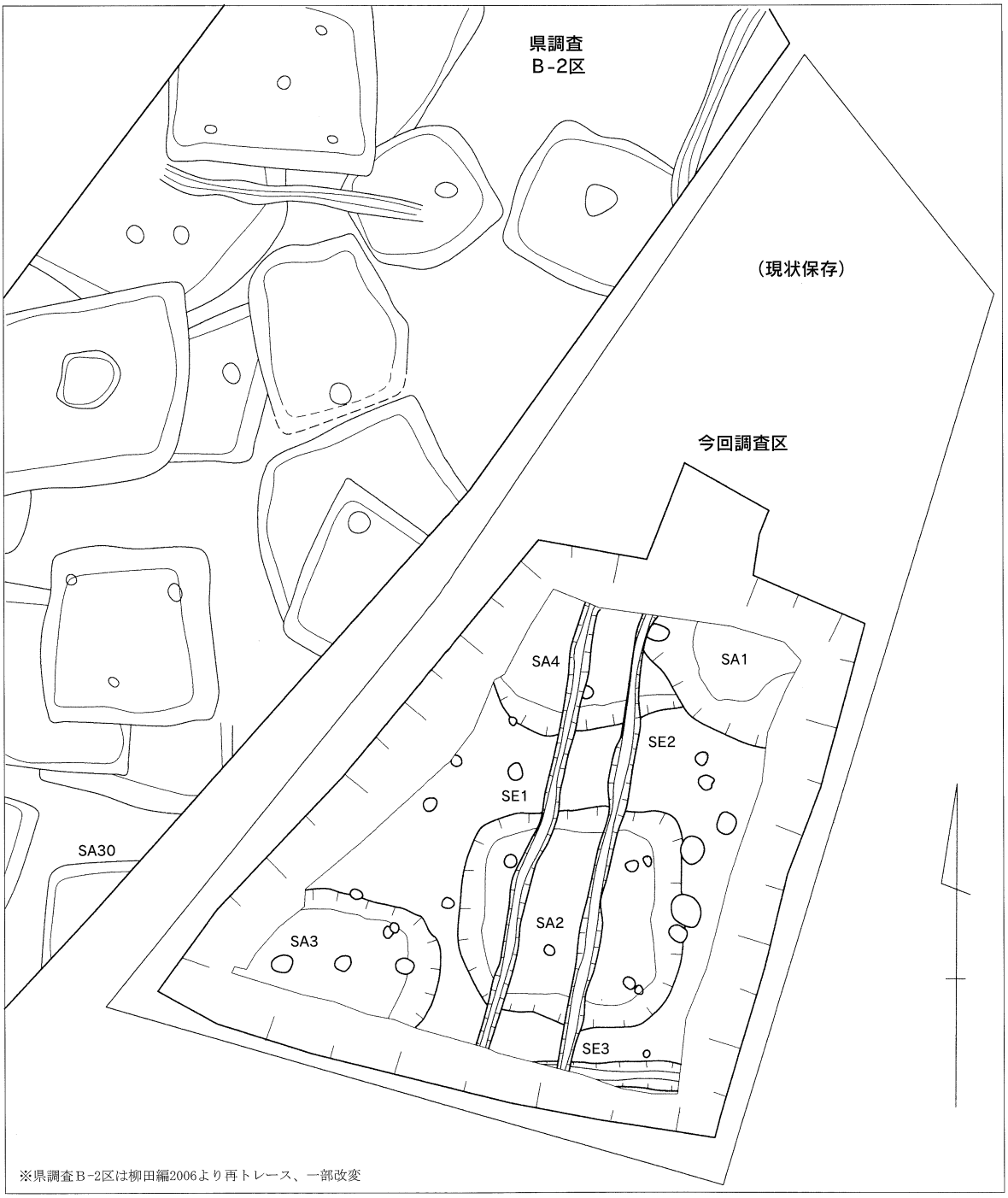
第２節　当該地における埋蔵文化財の取り扱い

事業対象範囲420㎡のうち、敷地南半の建物建築部分270㎡については、工事掘削が遺構面まで及ぶため、本発掘調査の実施による記録保存を行った。また簡易舗装の駐車場として利用する敷地北半の150㎡については、工事掘削が遺物包含層及び遺構面まで及ばないため、現状保存とした。

なお実際の調査時には、道路面から調査面まで1m近くもの深さがあり、また地盤が軟弱な砂であるため、安全確保等の理由から、調査区壁面をスロープ状にするため、建物建築部分の周囲１ｍの範囲を含めた300㎡を対象に、調査掘削を行った。

第Ⅲ章　調査成果

調査区全体で遺物包含層の堆積、竪穴住居４基、溝状遺構３条、ピット26基及びこれらに伴う遺物を検出した。



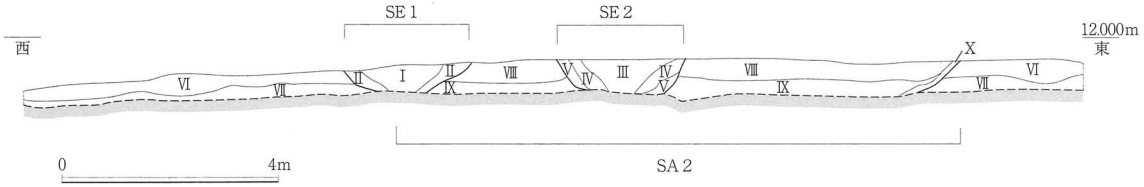
第３図　遺構配置図（Scale:1/200）

a. 遺物包含層（第４図）

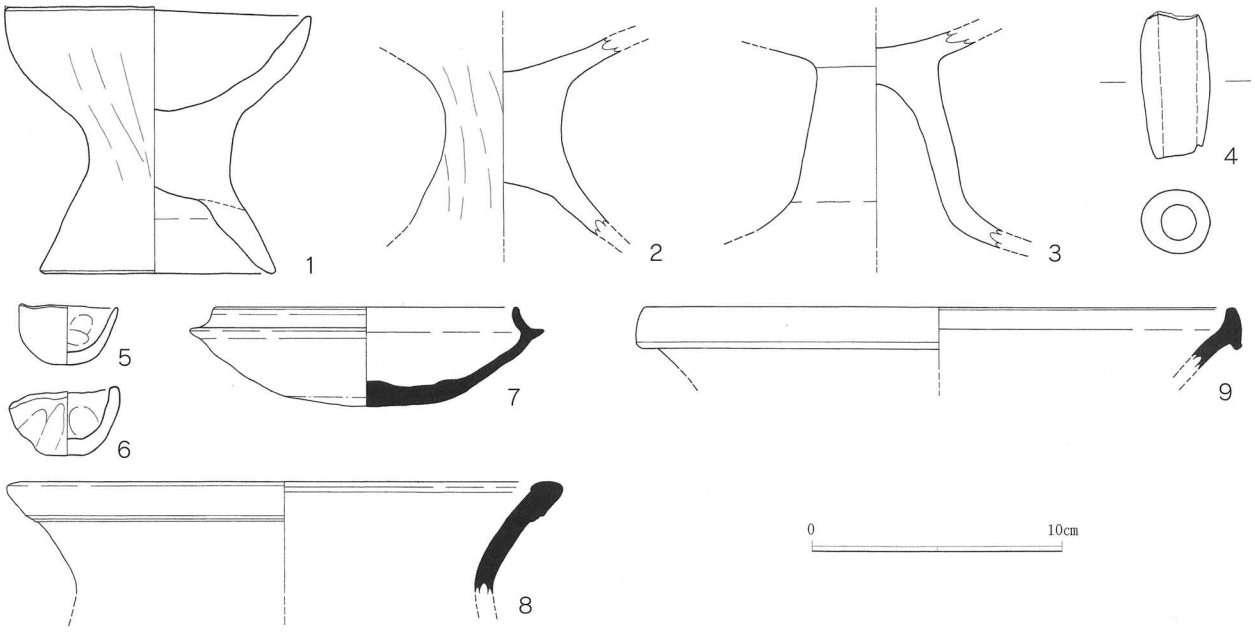
遺物包含層は30～40cm 程堆積し（Ⅵ・Ⅶ層。県調査時Ⅱ・Ⅲ層に対応）、包含層上に桜島文明テフラ（1471年噴出）かと思しき粒子を埋土中に持つ溝（ＳＥ２）が構築されている。遺物は県調査時と同じく古墳時代を主としながらも、中世のものも少量見られる。土層断面では、後述の２号竪穴住居の立ち上がりかと思しきライン（Ｘ層）が観察されたが、やや不明瞭であり、平面での検出も出来なかったため、遺構検出は包含層除去後の地山上面で行った。

【遺物】

１～３は土師器高坏である。３は風化が激しく調整は不明であるが、一部赤色顔料が残る。１、２は７世紀前半、３は５世紀～６世紀前半のものである。５・６は手捏ねの小型深鉢で、外面は指ナデ、内面は指オサエによって仕上げる。７はＭＴ85～ＴＫ43型式の須恵器坏身である。８は須恵器甕の口縁部で、全面に暗緑色の自然釉がかかる。９は13世紀後半～14世紀前半の東播系鉢の口縁部である。



Ⅰ　ＳＥ１埋土。暗灰色砂層。硬くしまり、径数cmの地山ブロックを含有。
Ⅱ　ＳＥ１埋土。暗灰色砂層。Ⅰに似るが、やや明度が高い。
Ⅲ　ＳＥ２埋土。黒褐色砂層。やわらかく、橙色テフラ（文明ボラか）含有。
Ⅳ　ＳＥ２埋土。黒褐色砂層。Ⅰに似るが、やや明度が高い。
Ⅴ　ＳＥ２埋土。暗褐色砂層。Ⅰに似るが、Ⅸ層土が混じる。
Ⅵ　遺物包含層。暗褐色砂層。硬くしまり、径数cmの地山ブロックを含有。
Ⅶ　遺物包含層。褐色砂層。きわめてやわらかい。Ⅵ層と地山との漸移層。
Ⅷ　ＳＡ２埋土。暗褐色砂層。Ⅵに似るが、やや明度高い。
Ⅸ　ＳＡ２埋土。褐色砂層。硬くしまり、径数cmの地山ブロックを含有。
Ⅹ　ＳＡ２埋土。暗褐色砂層。Ⅷ、Ⅸに比してややわらかい。

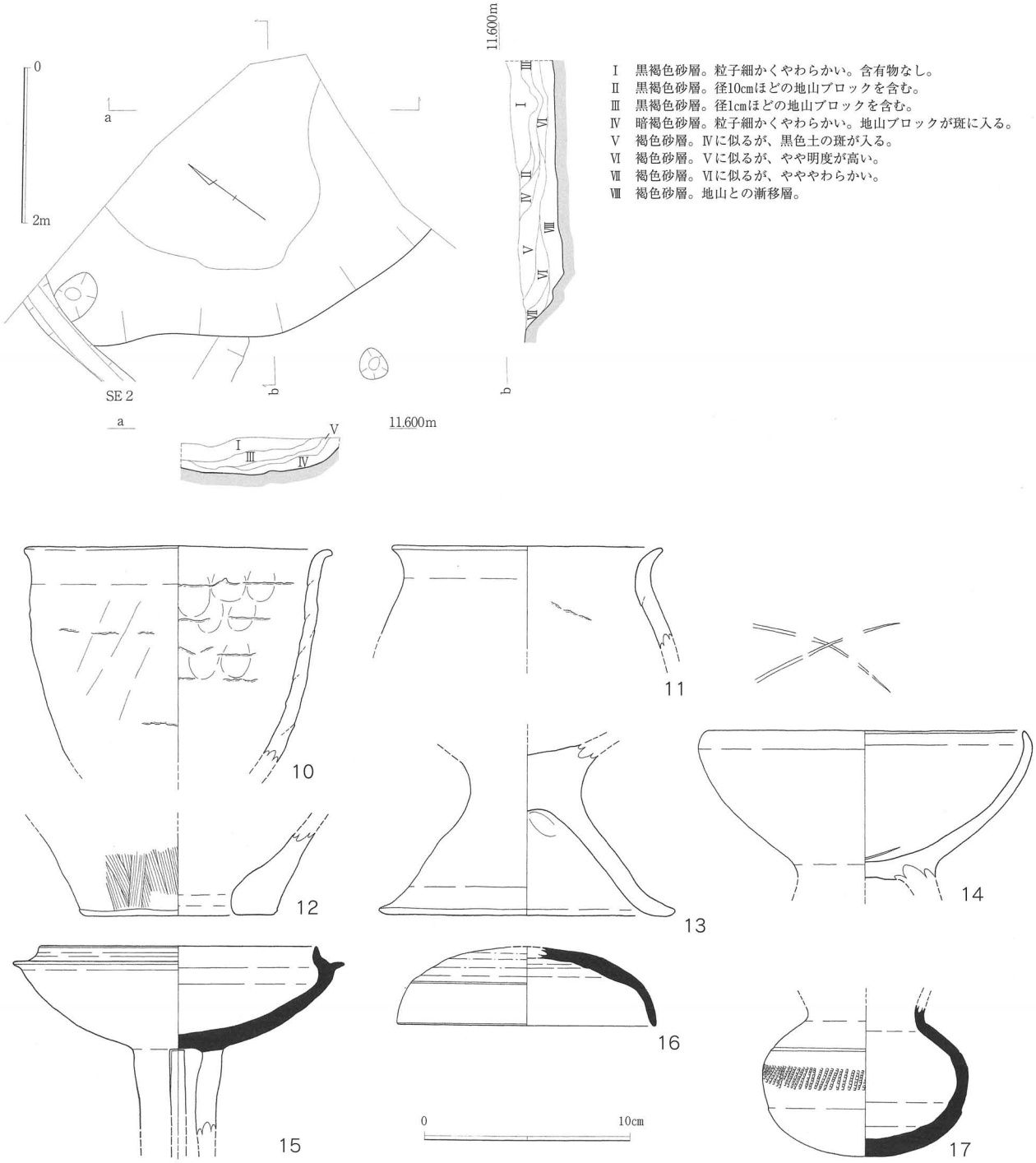


第４図　遺物包含層セクション図（Scale:1/70）及び出土遺物（Scale:1/3）

b．竪穴住居

１号竪穴住居（ＳＡ１）（第５図）

調査区の北東端において一部を検出した竪穴住居で、後述のＳＡ４を切って存在する（第10図）。平面不整形であるが、検出長軸3.2m、深さは最深で60cm である。壁面の立ち上がりは緩やかなスロープ状であるが、これは住居本来の形ではなく、軟弱な砂を掘り込んで構築されたために、大きく崩れたものと考えられる。遺物より、６世紀後葉から７世紀初めである。



第５図　１号竪穴住居実測図（Scale:1/80）及び出土遺物（Scale:1/3）

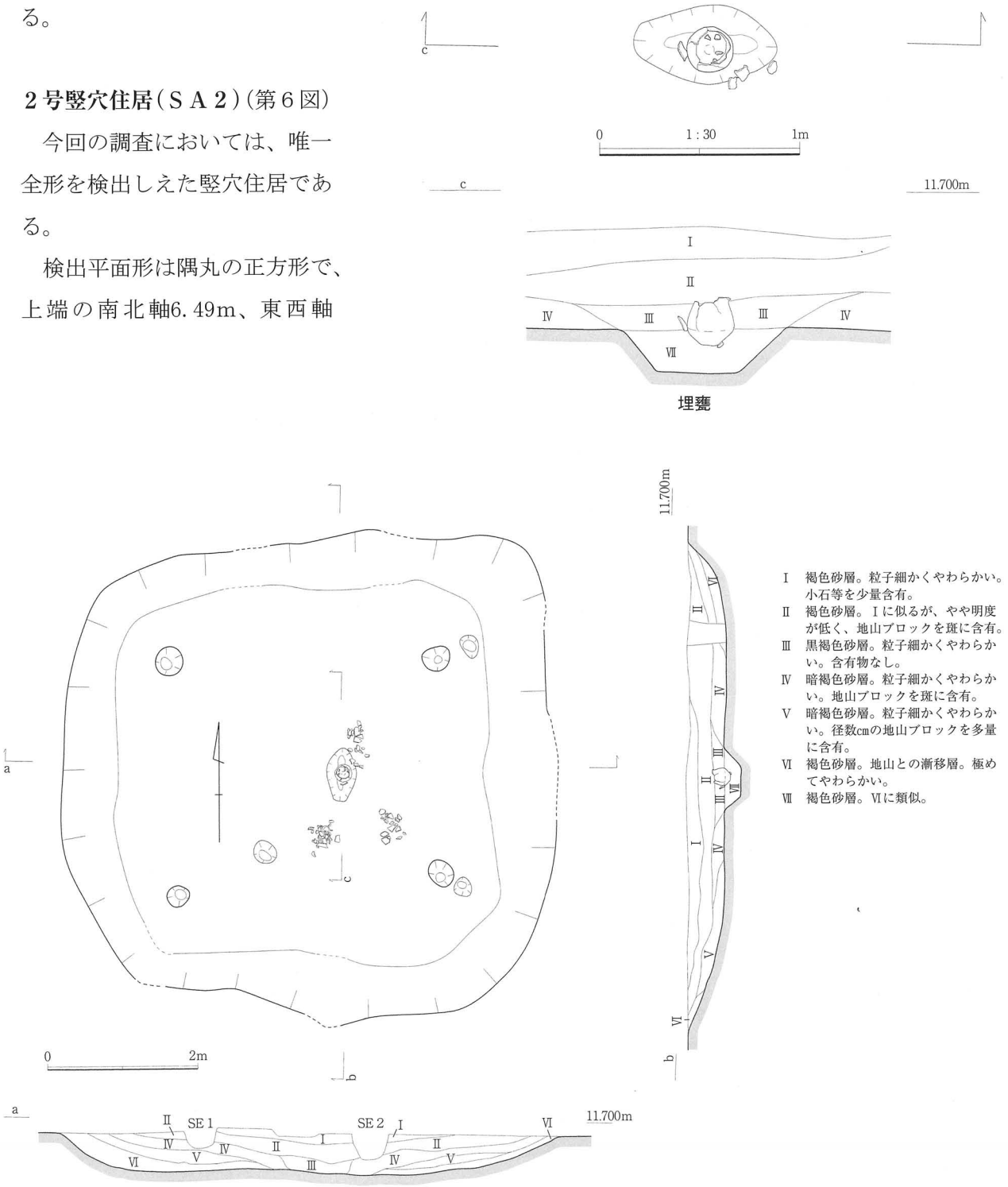
【遺物】

10、11は６世紀後葉～７世紀前半の甕ないし甑の口縁部で、10は長胴で外面に煤が付着し、11は球形胴である。12は単孔つつ抜けの甑底部である。13は6世紀後半～７世紀前半の土師器高坏脚部で、わずかに赤彩が残る。14は６世紀台の土師器高坏の坏部である。内面にＸ字状の線刻が施される。15はＴＫ43～ＴＫ209型式の須恵器高坏である。16はＭＴ85～ＴＫ209型式の須恵器坏蓋である。17は須恵器瑳の胴部である。

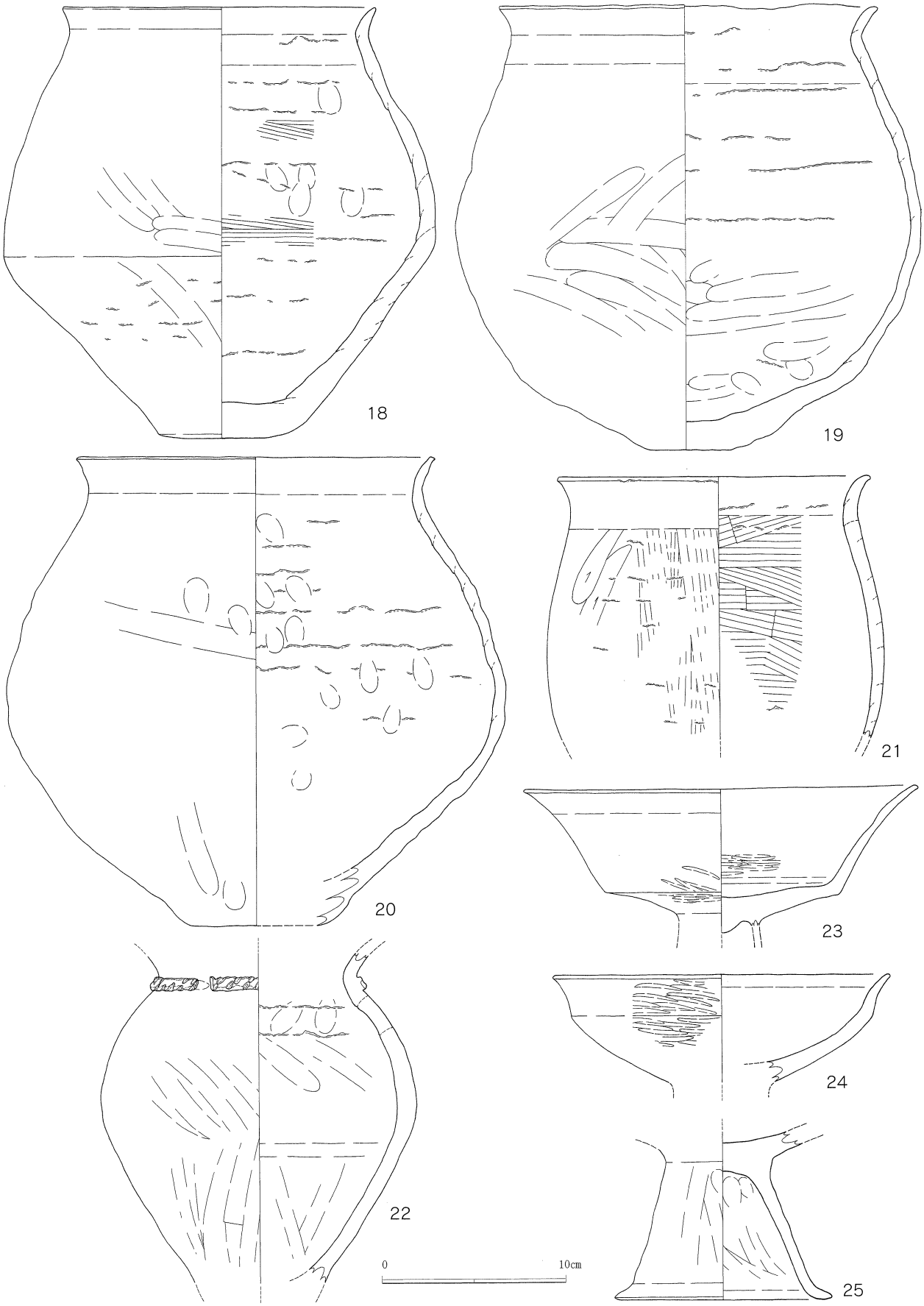
２号竪穴住居（ＳＡ２）（第６図）

今回の調査においては、唯一全形を検出しえた竪穴住居である。

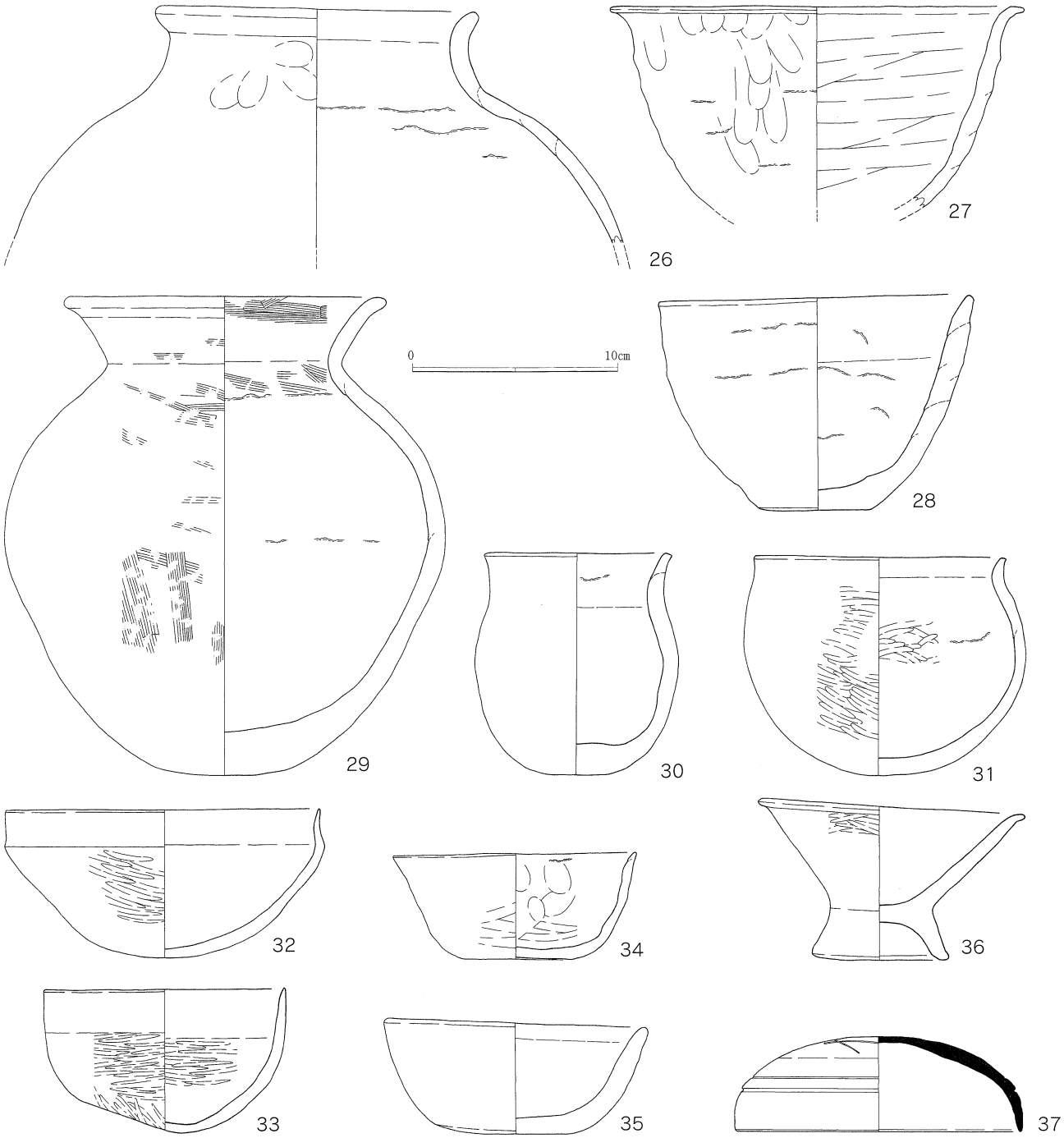
検出平面形は隅丸の正方形で、上端の南北軸6.49m、東西軸



第６図　２号竪穴住居実測図（Scale:1/80）



第７図　２号竪穴住居出土遺物①（Scale:1/3）



第８図　２号竪穴住居出土遺物②（Scale:1/3）

6.54m、下端南北軸4.77m、東西軸4.83m、最深で56cmである。床面で検出された４基の主柱穴は上端径35cm 前後で、床面のほぼ中央には埋甕が設置されている。壁面の立ち上がりはスロープ状であるが、遺構埋土が全体的にすり鉢状の堆積をしており、１号住居と同じく遺構本来の形は崩れている。遺物の出土はⅡ層に集中するが、Ⅱ層下の層中でも、全面的に細片が一定量出土する。埋甕の設置高や遺物の出土層位から、Ⅱ層下のラインが、当時の生活床面の高さと考えられる。遺物はほぼ６世紀後葉～７世紀前葉におさまるが、唯一、高坏の坏部21のみが古墳時代中期前半以前の

様相である。ただし出土位置が遺構北東角の壁面が崩れたスロープ状の部分であるため、流れ込みと思われる。

【遺物】

18～20は６世紀後葉～７世紀前葉の中型球形胴甕である。18は住居床面のほぼ中央において埋甕として埋設されていたもので、胴部中程に稜が入る程に張った菱形に近い側面形である。外面は全面的にナデであるが、胴部上半は比較的丁寧に施しているのに比して、下半はやや粗雑で、粘土継ぎ目が残る。内面は横位のハケが数箇所に見られるが、全面的に施してはいない。外面の胴部下半には煤が付着する。20は底部を欠損するが、ほぼ全形を復元しうる。18と同じく胴部中程の張った菱形に近い側面形である。内外面ともにやや丁寧なナデを施す以外は、外面は縦ないし横方向のナデ、内面には指オサエのあとが多数残る。また内面には粘土継ぎ目が明瞭に残る。21は小型の甕である。内面は縦位のハケののちナデ、一部ケズリを施す。内面は横位のハケが明瞭に残る。外面における粘土継ぎ目の残存が顕著である。22は頸部に列点文を施した粘土帯が巡る、成川系の小型甕である。外面胴部上半は斜位のナデ、下半は縦位のナデを施す。また外面には全面的に煤が付着する。

23・24は高坏の坏部である。23は坏部の第１口縁と第２口縁の境が明瞭で、本遺構出土の遺物の中ではやや古い様相を呈す。脚部を欠損するため、細かな時期は比定できないが、坏部の形態は古墳時代中期前半以前の様相である。25はハの字状に大きく開く形態の高坏の脚部である。24、25は６世紀後葉～７世紀前葉に比定される。

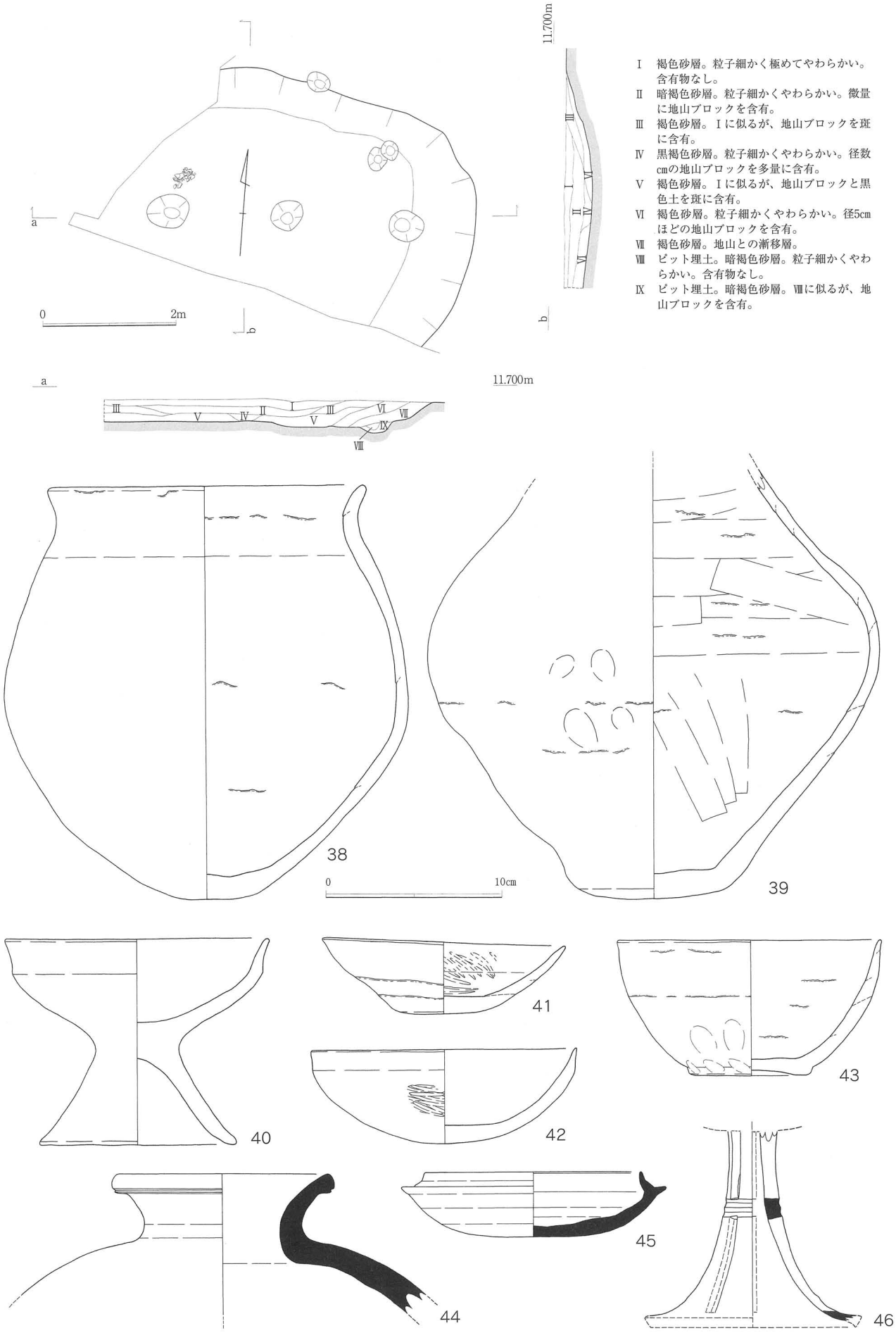
26は６世紀後葉～７世紀前葉の大型壺である。内外面ともにナデであり、外面は特に丁寧に施されているようであるが、摩滅が激しく、判然としない。29は６世紀後葉～７世紀前葉の中型壺で、外面上半に煤が付着する。今塩屋・松永編年の7期前後のものである。外面全面及び内面口縁部に8条/cmのハケが施される。30は小型の壺である。全体的に摩滅が激しい。

27・28は浅鉢である。27は口縁部がつまみ出され屈曲する。内外面ともにナデで、外面には一部粘土紐の接合痕が残る。28は木の葉底で、胴部内・外面に粘土紐接合痕が明瞭に残る。31は深鉢である。内外面ともに全面的にミガキを施す。

32～35は坏である。32は6世紀後葉の完形の須恵器模倣坏である。外面にはミガキを施し、口縁部及び内面は丁寧なナデによる。33は底面がへこむが、内外面ともにミガキと丁寧なナデを施す。内外面ともに赤彩が施される。34は内外面ともに板状工具によるナデを施す。35は完形であるが、外面は摩滅が激しく、調整等判然としない。内面は丁寧なナデによる。

36は小型の高坏である。内外面ともに丁寧なナデと、一部ミガキを施す。

37はＭＴ85～ＴＫ43型式の須恵器坏蓋である。天井部に×字状のヘラ記号が線刻で施される。



第９図　３号竪穴住居実測図（Scale:1/80）及び出土遺物（Scale:1/3）

３号竪穴住居（ＳＡ３）（第９図）

【遺構】

調査区の南西端で一部を検出した竪穴住居である。検出したのは北東コーナー部のみであり、規模等、不明である。隣接する平成15年度宮崎県埋蔵文化財センター調査におけるＢ－２区ＳＡ30（柳田編　2006）と同一遺構の可能性もあるが、軸方向が微妙に異なり、また同一遺構の場合、上端幅12m以上の大型竪穴住居となるため、可能性は低い。検出面から床面まで、最深で50cmである。床面で検出されたピットのうち、主柱穴と思しき１基の上端径46cmである。１・２号住居と同じく、遺構本来の形は崩れている。遺物の年代観は２号住居と同じく６世紀後葉～７世紀前葉であり、県調査時ＳＡ30にも、ほぼ同様の年代が与えられている。

【遺物】

38、39は6世紀後葉～7世紀前葉の中型球形胴甕である。38の調整はナデによると思われるが、全体的に摩滅が激しく判然としない。39の外面は比較的丁寧なナデを施されているようであるが、38と同じく摩滅が激しい。内面には板状工具によるナデ痕が残る。

40も同じく6世紀後葉～7世紀前葉の小型高坏である。内外面ともに摩滅が激しく調整は判然としない。

41・42は坏である。41は外面ナデ調整かと思われるが、摩滅が激しい。粘土紐の接合痕が明瞭に残る。内面はミガキにより、丁寧に仕上げられている。底面には木の葉痕が残る。42は精良な胎土を用い、外面はミガキ、内面はナデ調整による。42は７世紀前葉の様相である。

43は指オサエによって高台状の底部を作り出した深鉢である。内面、外面ともにナデ調整によるが、両面ともに粘土紐の接合痕が明瞭に残る。

44は須恵器甕の口縁部と肩部で、外面は格子状タタキ、内面には同心円当て具痕が残る。45はＴＫ43～ＴＫ209型式の須恵器坏身、46は高坏の脚部で、三方向に長方形の透かしが入る。

４号竪穴住居（ＳＡ４）（第10図）

調査区北西端において一部を検出した竪穴住居で、東部において前述の１号住居に切られる。検出されたのは南西コーナー部のみであり、規模等不明であるが、隣接する県調査時Ｂ－２区においては、本遺構に連なるものが検出されていないため、上端長軸が7.5mを越えることはない。検出面から床面まで、最深で58cm、主柱穴と思われるピットの検出はなかった。

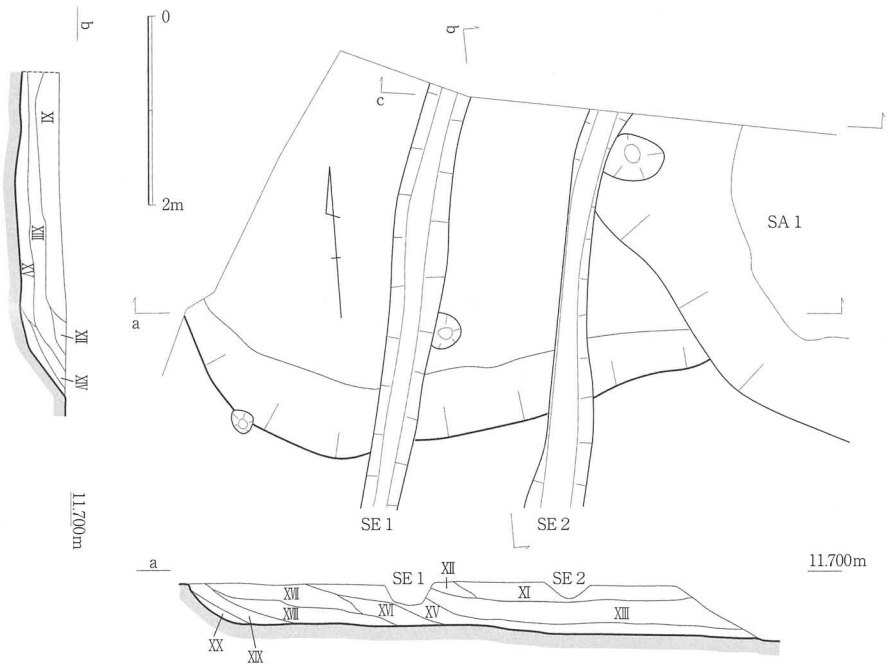
【遺物】

47はＴＫ10型式の須恵器坏身である。

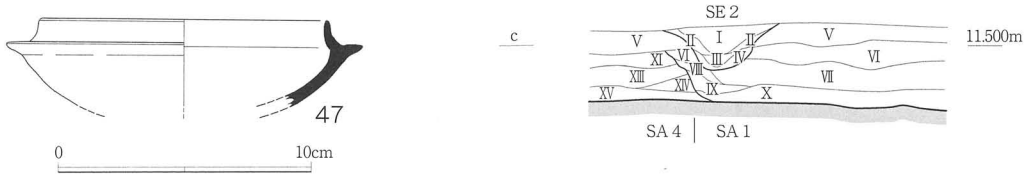
ｃ．溝状遺構

１号溝状遺構（ＳＥ１）（第３図）

調査区を南北に縦断する幅狭の溝状遺構で、後述のＳＥ２と1.0mの間隔で並列する。幅50cm、深さ50cmである。



Ⅰ　ＳＥ２埋土。第４図Ⅲ。
Ⅱ　ＳＥ２埋土。第４図Ⅳ。
Ⅲ　ＳＥ２埋土。第４図Ⅴ。
Ⅳ　ＳＥ２埋土。暗褐色砂層。粒子細かく硬くしまる。
Ⅴ　遺物包含層。第４図Ⅶ
Ⅵ　ＳＡ１埋土。第５図Ⅰ。
Ⅶ　ＳＡ１埋土。第５図Ⅲ。
Ⅷ　ＳＡ１埋土。第５図Ⅴ。
Ⅸ　ＳＡ１埋土。第５図Ⅶ。
Ⅹ　ＳＡ１埋土。第５図Ⅵ。
Ⅺ　ＳＡ４埋土。暗褐色砂層。粒子細かくやわらかい。含有物なし。
Ⅻ　ＳＡ４埋土。暗褐色砂層。Ⅺに似るが、地山ブロックを多量に含有。
ⅩⅢ　ＳＡ４埋土。褐色砂層。地山ブロックを含み、ややしまりあり。
ⅩⅣ　ＳＡ４埋土。暗褐色砂層。粒子細かくやわらかい。Ⅴに似る。
ⅩⅤ　ＳＡ４埋土。褐色砂層。ⅩⅢに似るが、含有物なし。
ⅩⅥ　ＳＡ４埋土。褐色砂層。ⅩⅢと同質。
ⅩⅦ　ＳＡ４埋土。褐色砂層。明度がやや低く、含有物なし。
ⅩⅧ　ＳＡ４埋土。褐色砂層。黒色土と地山ブロックを斑に含有。
ⅩⅨ　ＳＡ４埋土。褐色砂層。やわらかく、径数cmの地山ブロックを多量に含有。
ⅩⅩ　ＳＡ４埋土。褐色砂層。やわらかく、径10cm程の地山ブロックを多量に含有。



第10図　４号竪穴住居実測図（Scale:1/80）及び出土遺物（Scale:1/3）

２号溝状遺構（ＳＥ２）（第３・10図）

調査区を南北に縦断する幅狭の溝である。幅50cm、深さ50cmで、埋土中に桜島文明テフラ（1471年噴出）かと思しき粒子を含有する。

３号溝状遺構（ＳＥ３）

調査区の南端において、ごく一部を検出した東西方向の溝状遺構である。上端の幅50cm、深さ50cmである。

表２　遺物観察表

番号	種別	器種	部位	出土	法量（cm）				調整		色調		胎土	備考	注記記号
				遺構	口径	胴径	底径	器高	外面	内面	外面	内面			
1	土師器	高坏	完形	包含層	12.2		9.2	10.3	ナデ	ナデ	明赤褐色	明赤褐色	径6ミリ粒子含有		YSUノH2-5HG360
2	土師器	高坏	脚部	包含層					ナデ	ナデ	橙色	橙色	径1ミリ粒子含有		YSUノH2-5HG224
3	土師器	高坏	脚部	包含層					ミガキか	ナデ	橙色	橙色	径2ミリ粒子含有		YSUノH2-5HG79
4		土錘		包含層	長5.9・径2.8・孔1.4・重32.3						明赤褐色	明赤褐色			YSUノH2-5HG45
5	土師器	小型深鉢	完形	包含層	3.9			2.5	ナデ	オサエ	橙色	にぶい橙色	径2ミリ粒子含有		YSUノH2-5HG4
6	土師器	小型深鉢	完形	包含層	4.5			2.9	ナデ	オサエ	浅黄橙色	浅黄橙色	径3ミリ粒子含有		YSUノH2-5HG342
7	須恵器	坏身	ほぼ完形	包含層	11.9			4.0			灰色	灰色			YSUノH2-5HG363
8	須恵器	甕	口縁部	包含層	21.2						灰黄色	灰黄色		自然釉	YSUノH2-5HG77
9	陶器	鉢	口縁部	包含層	23.9						口:灰色・胴:にぶい赤褐色	灰色		東播系	YSUノH2-5HG337
10	土師器	甕	底部欠損	SA1	14.6				ナデ	ナデ	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	径4ミリ粒子含有	煤付着	YSUノH2-5SA1
11	土師器	甕	口縁部	SA1	13.0				ナデ	ナデ	橙色	にぶい黄褐色	径4ミリ粒子含有		YSUノH2-5SA1A1
12	土師器	甑	底部	SA1			9.3		ナデ	ナデ	橙色	橙色	精良	単孔つつ抜け	YSUノH2-5SA1A
13	土師器	高坏	脚部	SA1			13.6		ナデ	ナデ	橙色	橙色	2ミリ粒子含有		YSUノH2-5SA1 12＋13他
14	土師器	高坏	坏部	SA1	15.4				ミガキ	ミガキ	橙色	明黄褐色	精良	内面線刻	YSUノH2-5SA1A
15	須恵器	高坏	坏～脚	SA1	13.4				枡		オリーブ灰	にぶい黄色		二方向長方形スカシ	YSUノH2-5SA1 1
16	須恵器	坏蓋	口～底	SA1	12.6						灰オリーブ	灰オリーブ			YSUノH2-5SA1 5
17	須恵器	ハソウ	胴部	SA1		10.0					オリーブ黄色	灰オリーブ			YSUノH2-5SA1 1
18	土師器	甕	完形	SA2	16.6	23.2	7.5	23.4	ナデ	ナデ・ハケ	明赤褐色	明赤褐色	径5ミリ粒子含有	埋甕	YSUノH2-5SA2
19	土師器	甕	完形	SA2	20.4	25.2	4.5	24.2	ナデ	ナデ	明赤褐色	明赤褐色	径5ミリ粒子含有		YSUノH2-5SA2
20	土師器	甕	底部欠損	SA2	19.4	27.0	7.0		ナデ	ナデ	明赤褐色	明赤褐色	径5ミリ粒子含有		YSUノH2-5SA2
21	土師器	甕	口～胴	SA2	16.2				ハケ・ナデ	ハケ	橙色	橙色	径3ミリ粒子含有		YSUノH2-5SA2 28＋80＋85他
22	土師器	甕	胴部	SA2		17.2			ナデ	ナデ	明黄褐色	明黄褐色	径5ミリ粒子含有	頸部粘土帯	YSUノH2-5SA2 141＋143＋144
23	土師器	高坏	坏部	SA2	21.4				ミガキ	ミガキ	橙色	橙色	径1ミリ粒子含有	内外面赤色塗布	YSUノH2-5SA2-3 1＋2他
24	土師器	高坏	口縁部	SA2	18.4				ミガキ	ナデか	橙色	橙色	精良		YSUノH2-5SA2 81＋85＋95他
25	土師器	高坏	脚部	SA2			11.8		ナデ	ナデ	橙色	橙色	径5ミリ粒子含有		YSUノH2-5SA2 160
26	土師器	甕	口～肩	SA2	15.8				ナデ	ナデ	明黄褐色	明黄褐色	径5ミリ粒子含有		YSUノH2-5SA2 113＋153
27	土師器	浅鉢	底部欠損	SA2	25.2				ナデ	ナデ	明黄褐色	明黄褐色	径5ミリ粒子含有		YSUノH2-5SA2
28	土師器	浅鉢	完形	SA2	15.2		5.2	10.3	ナデ	ナデ	にぶい橙色	にぶい橙色	径5ミリ粒子含有	木の葉底	YSUノH2-5SA2 43
29	土師器	壺	完形	SA2	15.2	21.5		23.3	ハケ	ナデ・ハケ	明黄褐色	明黄褐色	径5ミリ粒子含有		YSUノH2-5SA2
30	土師器	小型壺	口～底	SA2	9.2	10.0		10.7	ナデ	ナデ	にぶい橙色	橙色	径4ミリ粒子含有		YSUノH2-5SA2 151
31	土師器	深鉢	完形	SA2	12.2			10.6	ミガキ	ミガキ	明赤褐色	橙色	精良	外面煤付着	YSUノH2-5SA2-1 ＋160＋161
32	土師器	坏	完形	SA2	15.2			7.2	ミガキ	ナデか	橙色	橙色	精良		YSUノH2-5SA2-1 1
33	土師器	坏	完形	SA2	11.8			6.9	ミガキ	ミガキ	明赤褐色	明赤褐色	精良		YSUノH2-5SA2 103
34	土師器	坏	完形	SA2	11.7		5.2	5.3	ナデ	ナデ	にぶい橙色	にぶい橙色	5ミリ以下粒子		YSUノH2-5SA2 59＋115
35	土師器	坏	完形	SA2	12.5		3.8	5.5	ナデか	ナデ	橙色	橙色	精良		YSUノH2-5SA2 50＋146
36	土師器	高坏	完形	SA2	13.0		6.7	7.5	ナデ	ナデ	明黄褐色	明黄褐色	精良		YSUノH2-5SA2
37	須恵器	坏蓋	一部欠損	SA2	13.8			4.6			灰オリーブ	灰オリーブ		外面ヘラ記号	YSUノH2-5SA2 2
38	土師器	甕	完形	SA3	17.9	22.9	23.4		ナデか	ナデか	明黄褐色	明黄褐色	径5ミリ砂粒多量含有		YSUノH2-5SA3 1
39	土師器	甕	口縁部欠損	SA3		25.7	8.5		ナデか	板状工具ナデ	明赤褐色	明赤褐色	径5ミリ砂粒多量含有	外面一部黒斑	YSUノH2-5SA3 42
40	土師器	高坏	完形	SA3	15.0		11.2	11.7	ミガキか	ミガキか	明黄褐色	明黄褐色	比較的精良		YSUノH2-5SA3 42
41	土師器	坏	完形	SA3	13.8		4.8	4.1	ナデか	ミガキ・ナデ	明黄褐色	明黄褐色	雲母状微少粒子含有	内面仕上げ丁寧	YSUノH2-5SA3 14
42	土師器	坏	完形	SA3	15.1			5.4	ミガキ・ナデ	ナデ	明黄褐色	明黄褐色	精良		YSUノH2-5SA3 5＋3＋38
43	土師器	深鉢	完形	SA3	14.9		6.9	7.7	ナデ・オサエ	ナデ・オサエ	明黄褐色	明黄褐色	1cm以下の小石を含有	高台状の底部	YSUノH2-5SA3 44
44	須恵器	甕	口縁部	SA3	12.0				格子目タタキ	同心円当て具	灰オリーブ	灰オリーブ		焼成やや不良	YSUノH2-5SA3 40
45	須恵器	坏身	完形	SA3	12.3			3.6			灰オリーブ	灰オリーブ		赤焼け	YSUノH2-5SA3 22
46	須恵器	高坏	脚部	SA3							灰オリーブ	灰オリーブ		上下二段三方向長方形スカシ	YSUノH2-5SA3
47	須恵器	坏身	底部欠損	SA4	11.4						オリーブ灰	オリーブ灰			YSUノH2-5SA4 12

第Ⅳ章　まとめ

山崎上ノ原第2遺跡では、過去調査時に62軒、今回調査において4軒、総計66軒の竪穴住居が検出されている。現在までの総調査面積は4,000㎡程であり、非常な遺構密度といえよう。集落の使用は5世紀後半から7世紀中頃まで連綿と続けられ、今回調査において検出された4基の住居のうち3基は、集落の最盛期とされる6世紀後半～7世紀初頭に相当する（柳田編 2006）。今回調査区は砂丘上でも海側の際にあたり、砂丘平坦面をいっぱいに使って居住空間としていたことがわかる。遺跡の位置する第2砂丘は最大幅（東西）0.4km弱と極めて狭小であり、利用できる空間は限られている。今時調査において検出された住居のセクションを観察すると、壁面の立ち上がりは軒並み崩れ、すり鉢状の断面形を呈しており、砂の地盤を住居として使用し続けるには多大な苦労を伴ったものと思われる。

しかし砂丘上における人間活動は連綿と続けられている。砂丘南端の猿野遺跡では、古墳時代前期の竪穴住居が検出されており、山崎上ノ原第2遺跡に先行する一連の集落と思われる。後出する古代期の集落は現在までのところ未検出であるが、第2砂丘上は古代官道の推定ルートとなっており、律令制下においては、より重要な役割を果たした可能性が高い。

人々が砂丘上にこだわり続けたのは、農耕による堤間低地の利用に利便性の高い立地のためかと思われる。砂丘の生産基盤としては海洋交易も想定されるが、他地域との交流を積極的に示す遺物の出土はない。また過去調査においては鉄滓や鞴等が出土しており、鉄製品の生産が行われていたと考えられるが、砂丘上では燃料の確保も容易ではなく、生産基盤となるほどの規模ではなかったであろう。やはり砂丘遺跡の生産基盤としては、堤間低地における農耕を想定するのが最も妥当かと思われる。第2砂丘に最も近接する第1砂丘との間の低地では、当時、水田として利用されていたことを証明する確たるものはない。しかし第1砂丘と内陸丘陵との間の低地では、弥生時代より農耕が行われていたことがプラントオパール分析により明らかとなっており（竹中編 2005）、第1砂丘と第2砂丘の間の低地でも同様の空間利用が行われていたことは想像に難くない。第1砂丘、第2砂丘の間の低地は、現在、一面の水田地帯となっているが、この風景は、1500年前の当時から変わらぬものであったろうかと思われる。

【参考文献】

柳田晴子編　2006年『山崎上ノ原第2遺跡Ⅱ』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第130集　宮崎県埋蔵文化財センター

南正覚雅士他編　2003年『山崎上ノ原第2遺跡・山崎下ノ原第1遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第79集　宮崎県埋蔵文化財センター

今塩屋毅行・松永幸寿　2002年「日向における古墳時代中～後期の土師器－宮崎平野部を中心にして－」（『古墳時代中・後期の土師器』第5回九州前方後円墳研究会発表要旨資料）

鳥枝誠編　1996年『猿野遺跡・萩崎第2遺跡』宮崎市文化財調査報告書第30集　宮崎市教育委員会

竹中克繁編　2005年『桜町遺跡』宮崎市文化財調査報告書第60集　宮崎市教育委員会

図版１　１・２号溝状遺構検出状況

図版２　包含層遺物出土状況

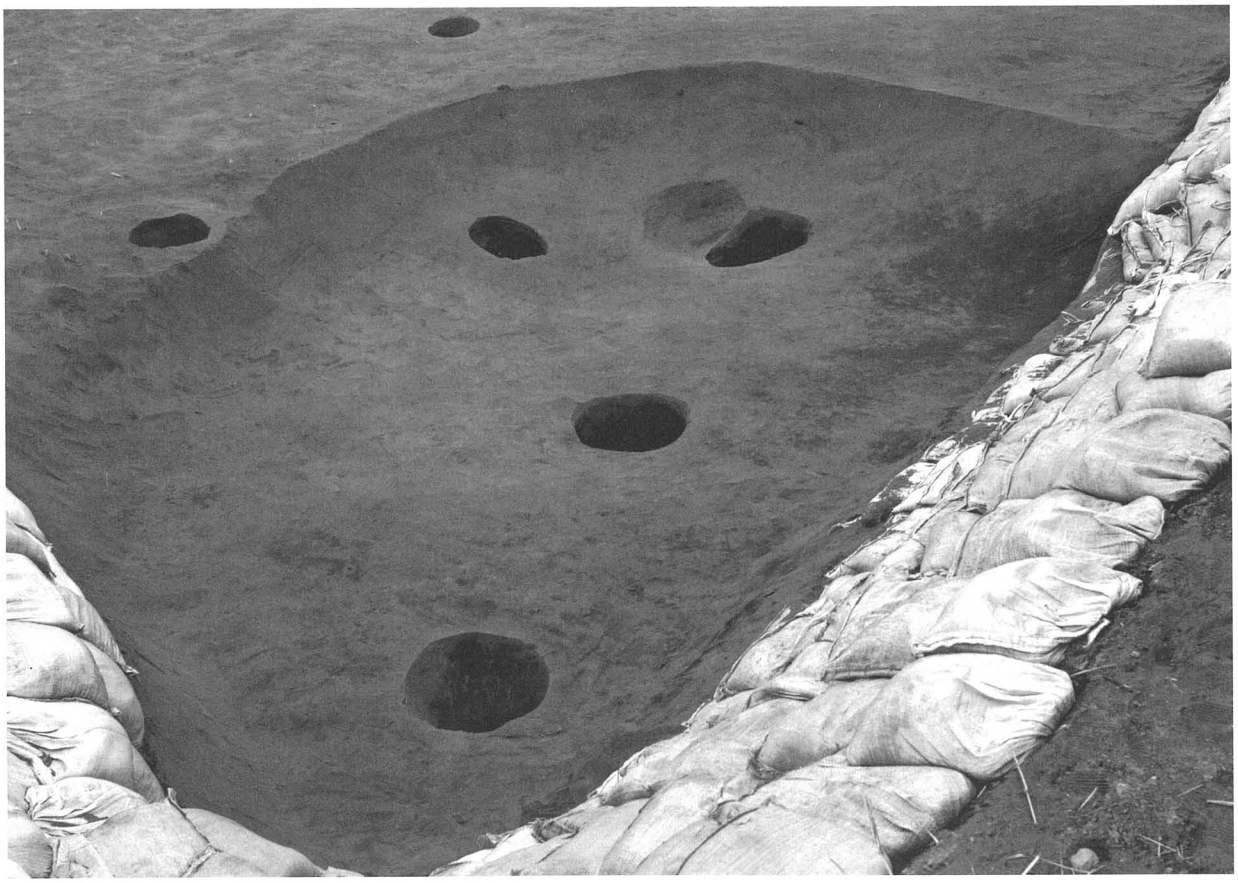
図版３　包含層土層堆積状況

図版４　１・４号竪穴住居

図版５　２号竪穴住居検出状況

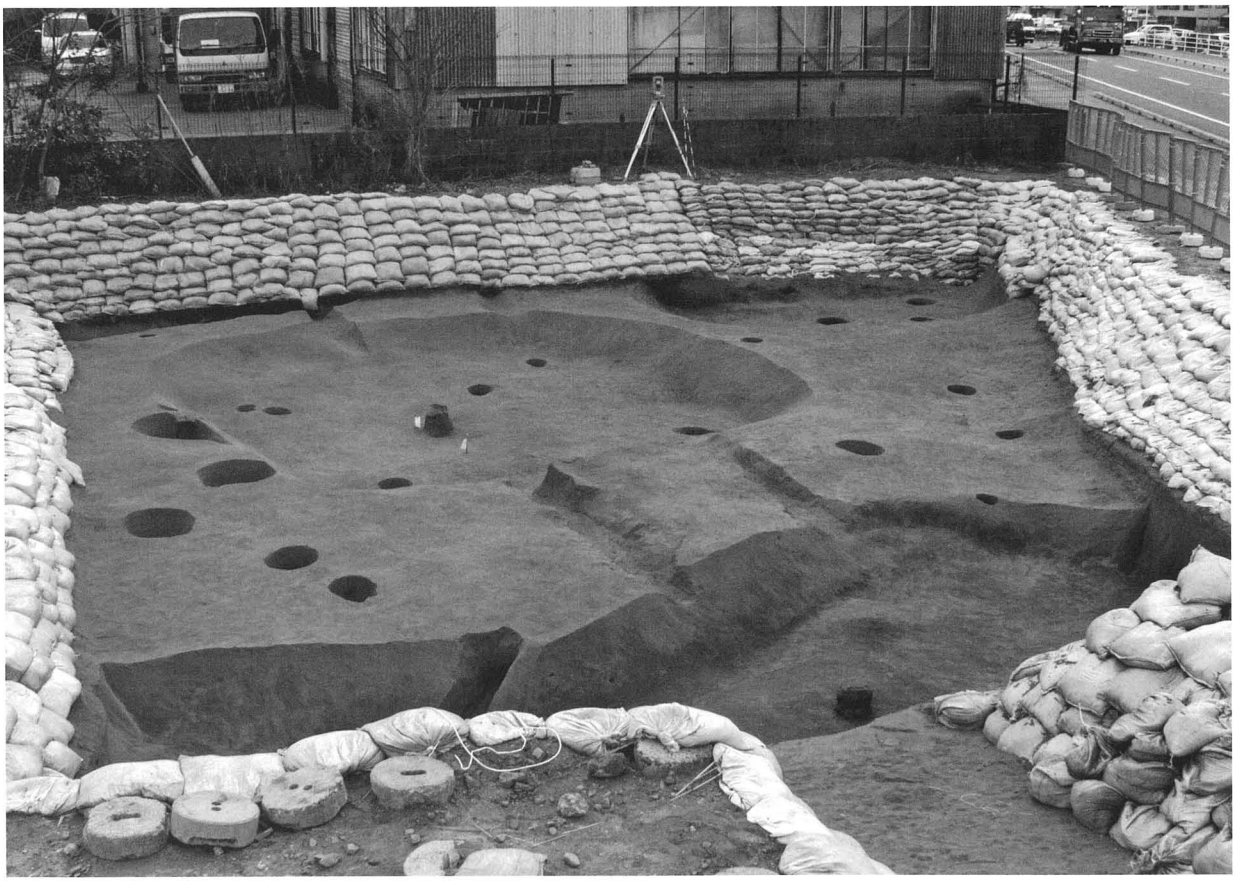
図版６　２号竪穴住居遺物出土状況

図版７　２号竪穴住居

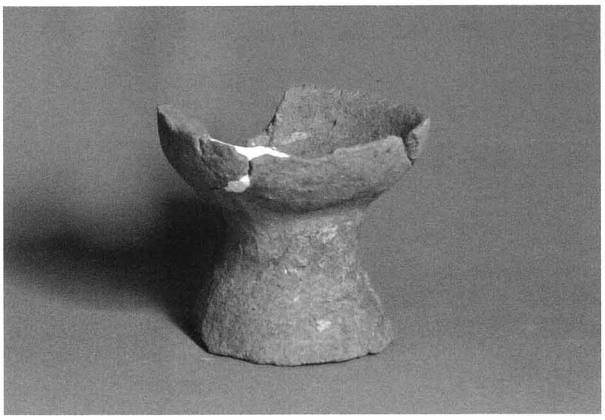


図版８　３号竪穴住居

図版９　４号竪穴住居

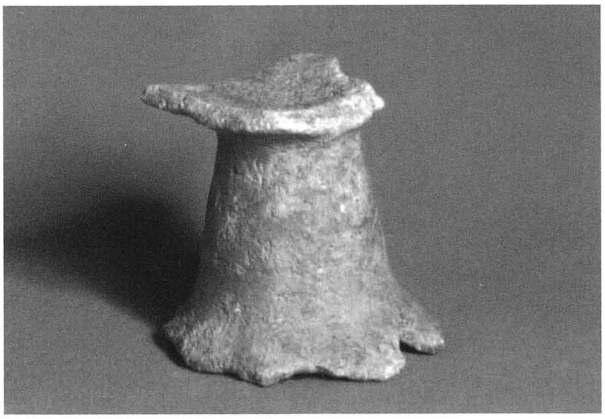


図版10　調査区全体完掘状況

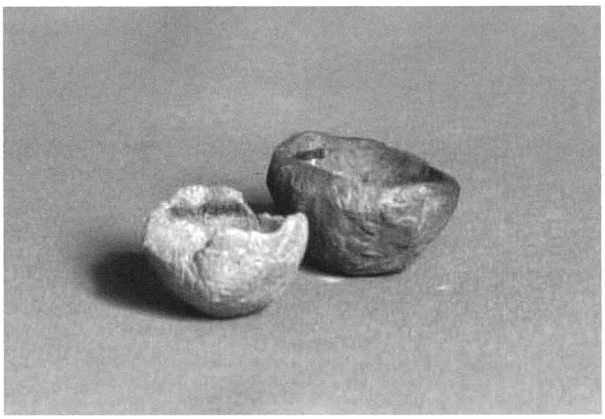


図版11　包含層出土土器(第4図1)

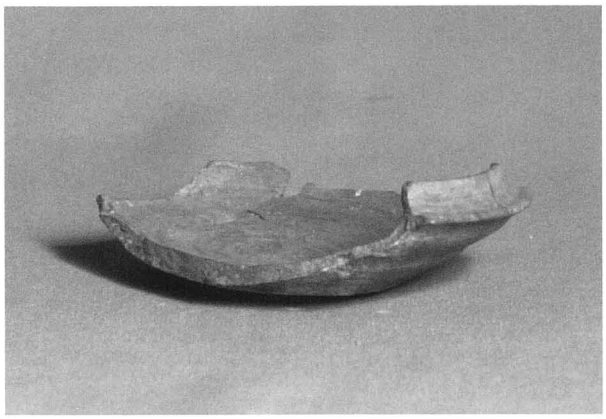
図版12　包含層出土土器（第4図2）



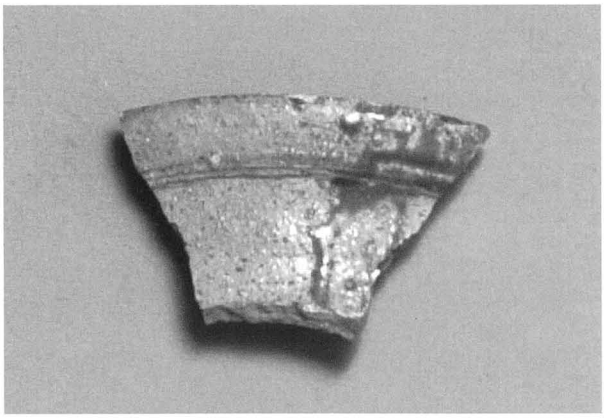
図版13　包含層出土土器（第4図3）



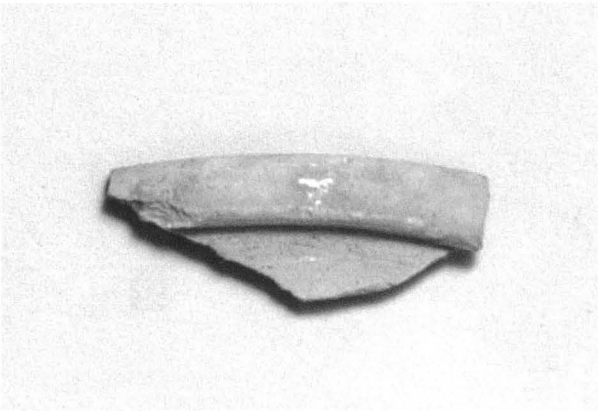
図版14　包含層出土土器（第4図5･6）



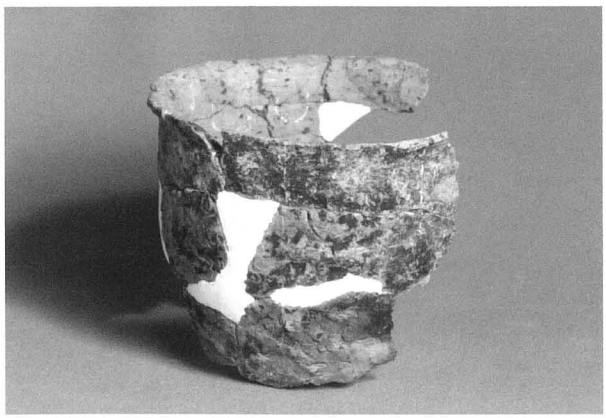
図版15　包含層出土土器（第4図7）



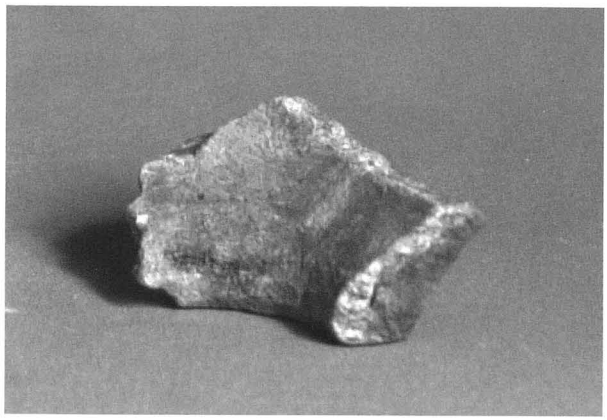
図版16　包含層出土土器（第4図8）



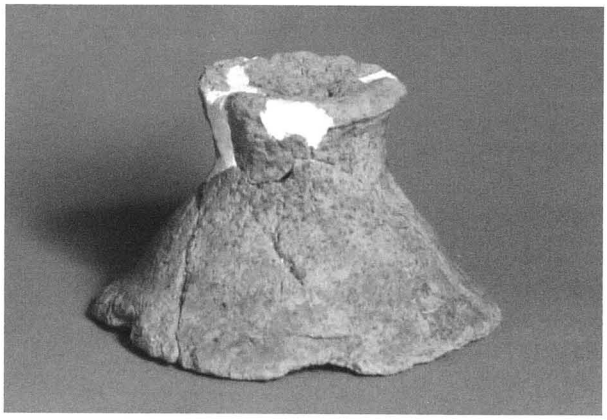
図版17　包含層出土土器（第4図9）



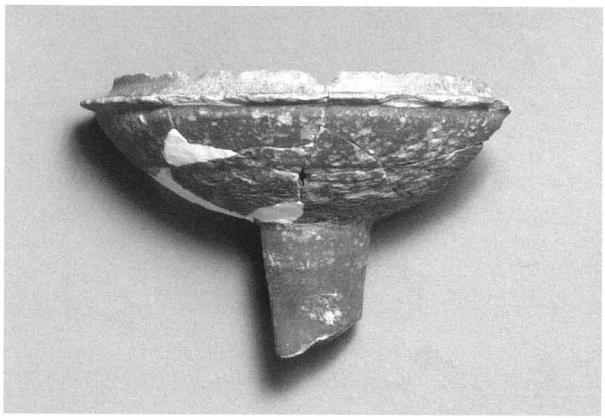
図版18　1号竪穴住居出土土器（第5図10）



図版19　１号竪穴住居出土土器（第5図12）

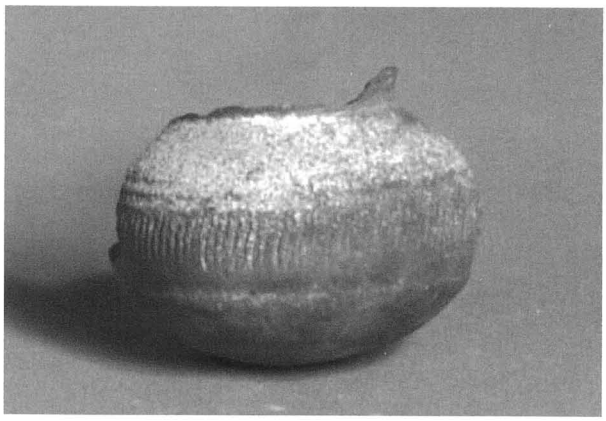


図版20　１号竪穴住居出土土器（第5図13）

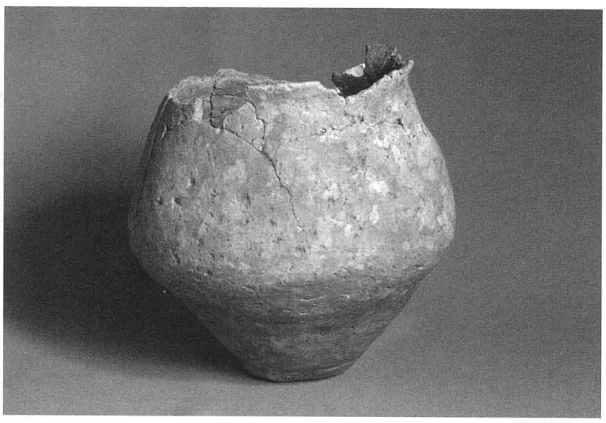


図版21　１号竪穴住居出土土器（第5図15）

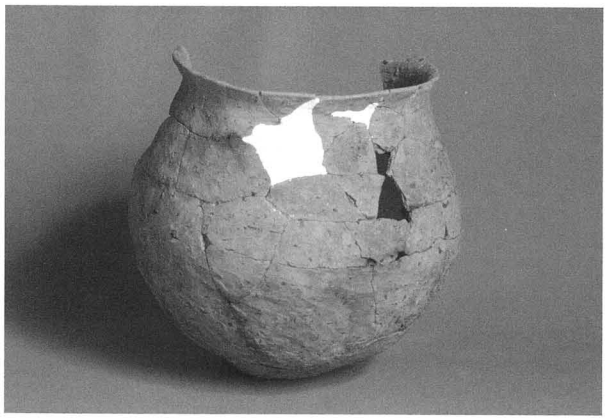
図版22　１号竪穴住居出土土器（第5図16）



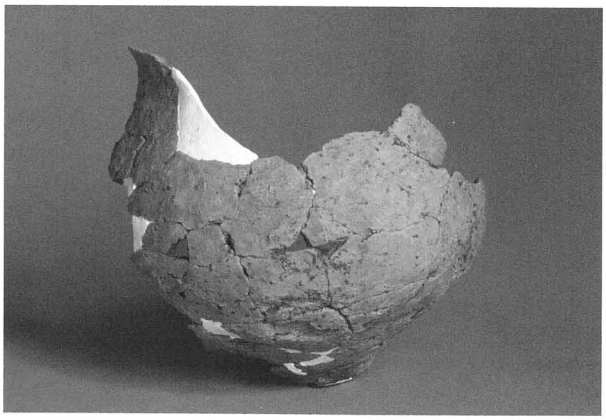
図版23　１号竪穴住居出土土器（第5図17）



図版24　２号竪穴住居出土土器（第7図18）



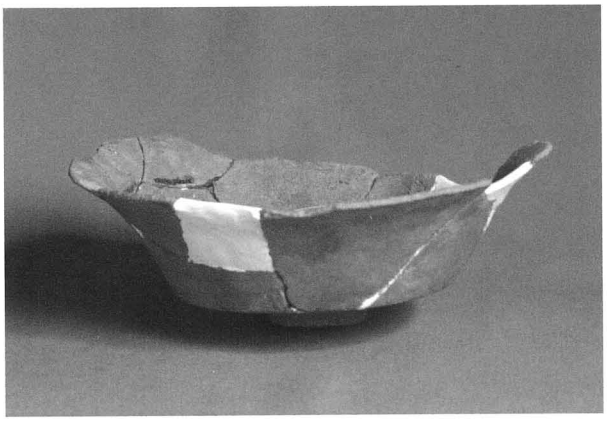
図版25　２号竪穴住居出土土器（第7図19）



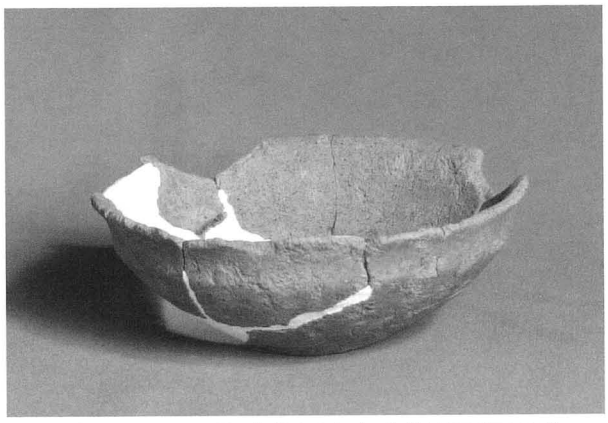
図版26　２号竪穴住居出土土器（第7図20）

図版27　２号竪穴住居出土土器（第7図21）

図版28　２号竪穴住居出土土器（第7図22）

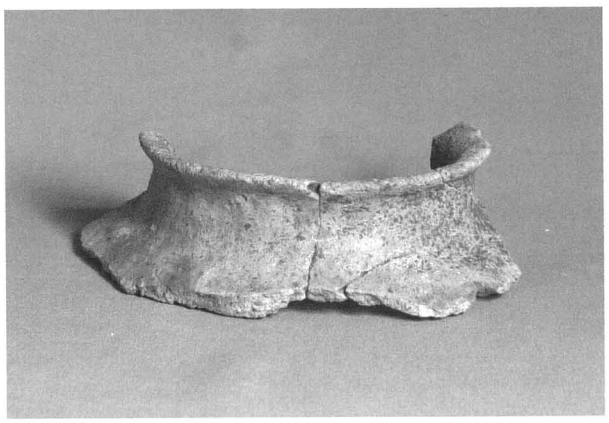


図版29　２号竪穴住居出土土器（第7図23）

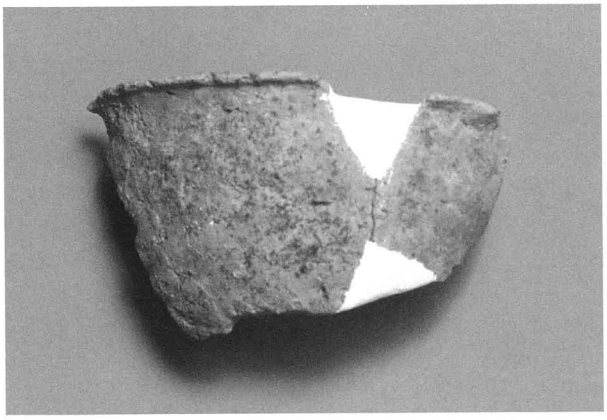


図版30　２号竪穴住居出土土器（第7図24）

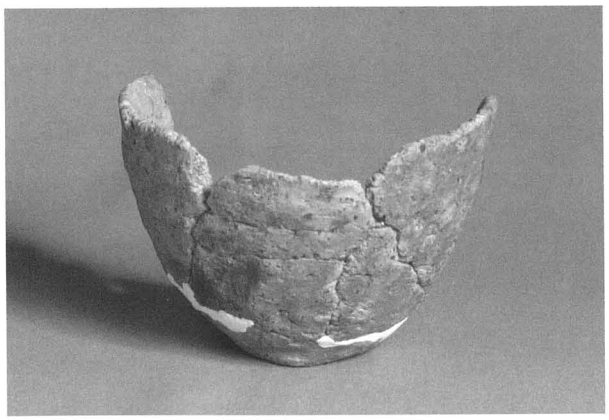
図版31　２号竪穴住居出土土器（第7図25）



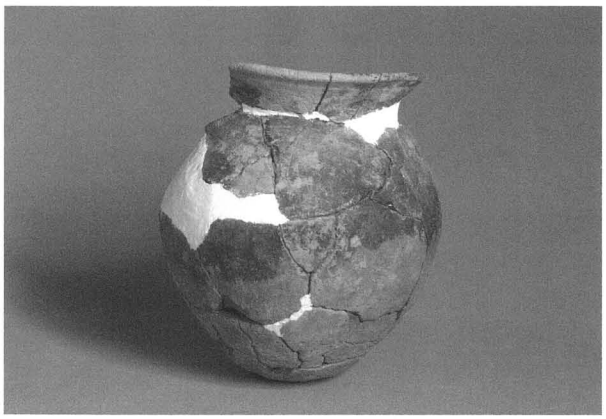
図版32　２号竪穴住居出土土器（第8図26）



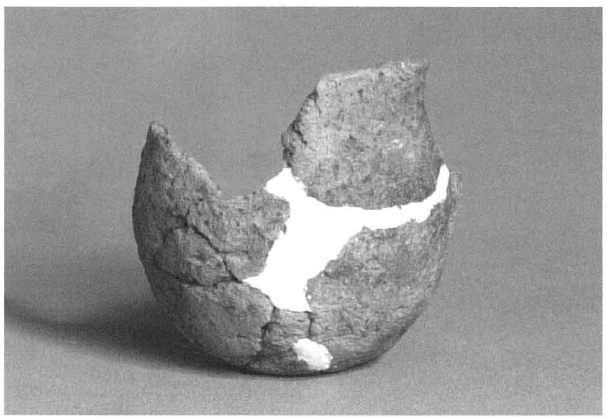
図版33　２号竪穴住居出土土器（第8図27）



図版34　２号竪穴住居出土土器（第8図28）

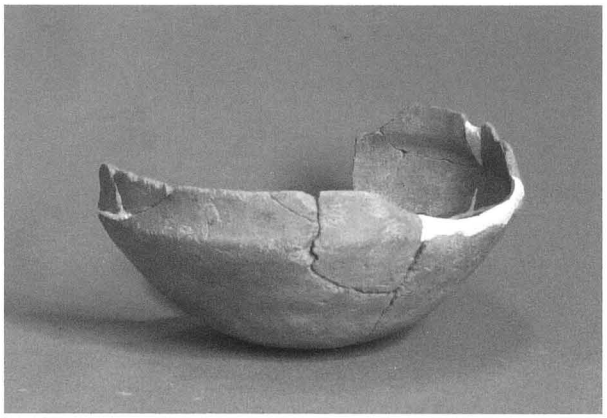


図版35　２号竪穴住居出土土器（第8図29）

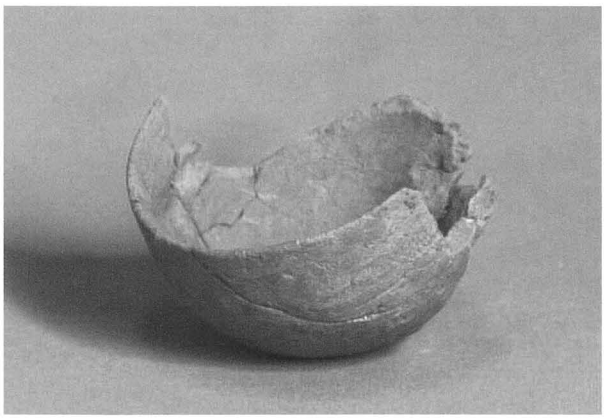


図版36　２号竪穴住居出土土器（第8図30）

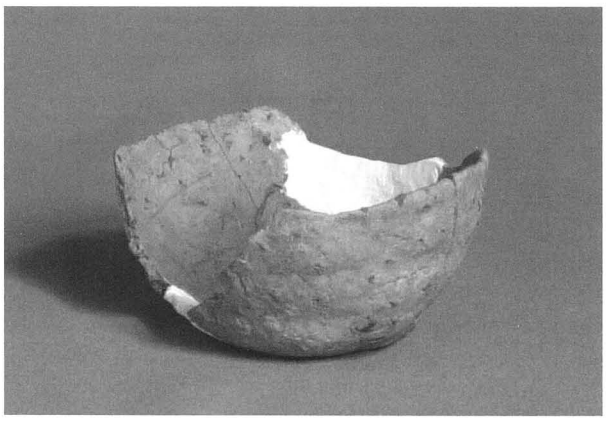
図版37　２号竪穴住居出土土器（第8図31）



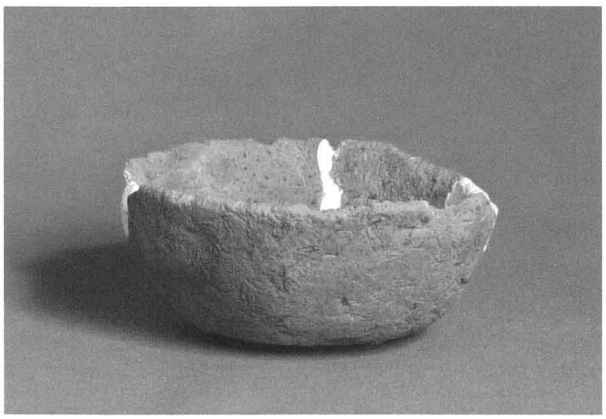
図版38　２号竪穴住居出土土器（第8図32）



図版39　２号竪穴住居出土土器（第8図33）

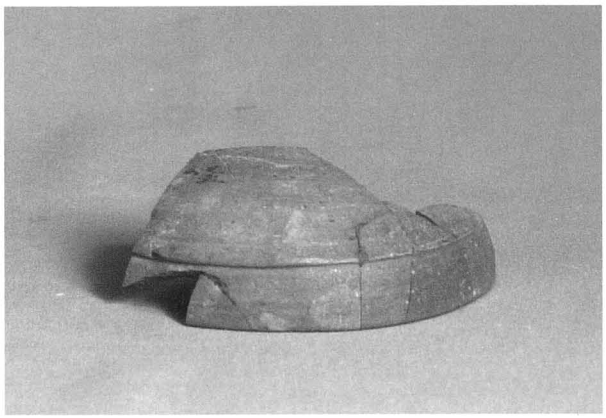


図版40　２号竪穴住居出土土器（第8図34）

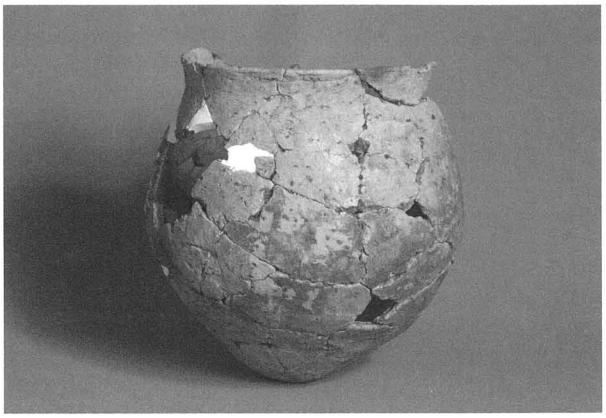


図版41　２号竪穴住居出土土器（第8図35）

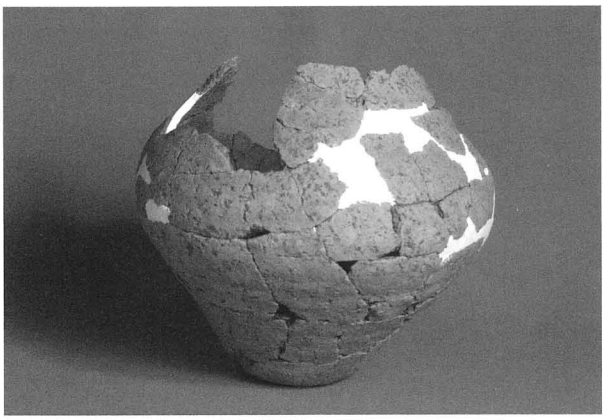
図版42　２号竪穴住居出土土器（第8図36）



図版43　２号竪穴住居出土土器（第8図37）



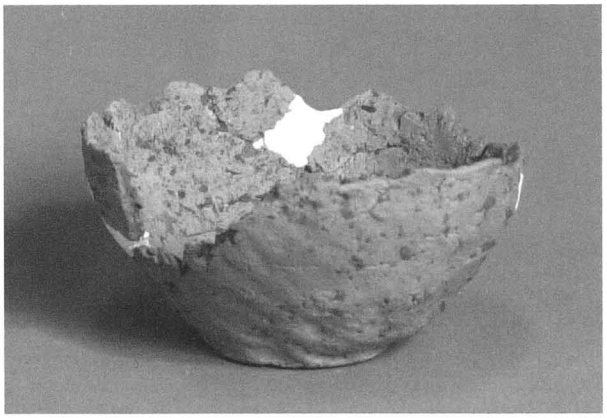
図版44　２号竪穴住居出土土器（第9図38）



図版45　３号竪穴住居出土土器（第9図39）

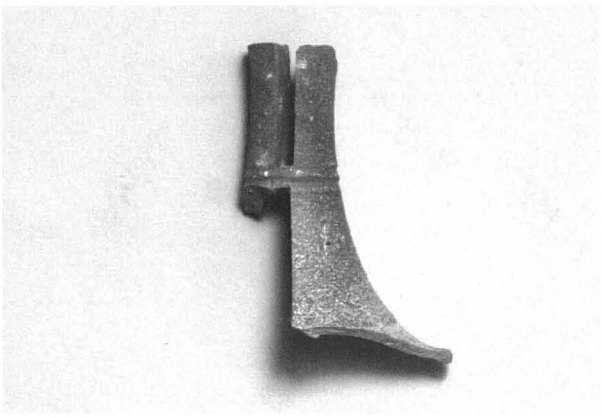
図版46　３号竪穴住居出土土器（第9図41）

図版47　３号竪穴住居出土土器（第9図42）



図版48　３号竪穴住居出土土器（第9図43）

図版49　３号竪穴住居出土土器（第9図44）



図版50　３号竪穴住居出土土器（第9図45）

報 告 書 抄 録

ふりがな	やまさきうえのはるだいにいせきⅢ
書　　名	山崎上ノ原第２遺跡Ⅲ
副　書　名	携帯電話用無線基地局建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻　　次	
シリーズ名	宮崎市文化財調査報告書
シリーズ番号	第69集
編集者名	竹中 克繁
編集機関	宮崎市教育委員会
所　在　地	〒880-0805　宮崎県宮崎市橘通東１丁目14番20号　TEL（0985）25－2111
発行年月日	2008年３月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
山崎上ノ原第２遺跡	宮崎県宮崎市山崎町上ノ原1101番1	45201		31°57′18″付近	131°27′45″付近	2006.11.27 ～ 2007.1.26	270	携帯電話用無線基地局

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
山崎上ノ原第２遺跡	集落	古墳	竪穴住居	土器	

宮崎市文化財調査報告書　第69集

山崎上ノ原第２遺跡 Ⅲ

携帯電話用無線基地局建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2008年

発 行　　宮崎市教育委員会